




津波ハザードマップについて

想定すべき2段階の津波

東日本大震災による甚大な津波被害を受け、内閣府中央防災会議専門調査会では、東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会報告において2つのレベルの津波を想定する必要があります。茨城県沿岸津波対策検討委員会では、この考え方にに基づき津波対策の検討を行いました。

L1 津波
比較的頻度の高い津波


発生頻度は相対的に高く、津波高は低いものの、大きな被害をもたらす津波（数十年から百数十年の頻度）



防護施設などを整備することで、人命・財産の保護・地域経済の確保を目指す

L2 津波
最大クラスの津波

発生頻度は極めて低いものの、発生すれば甚大な被害をもたらす津波



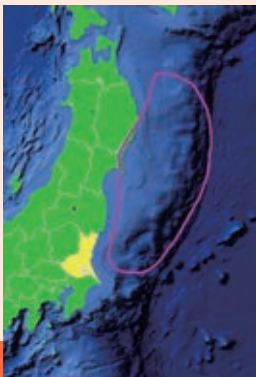
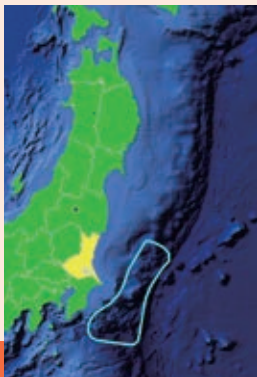
住民などの生命の保護を最優先とし、住民避難を軸とした総合的な防災対策を目指す

このハザードマップは、茨城県作成の最大クラスの津波（L2津波）による浸水想定及び東日本大震災の津波浸水実績を示しています。

想定津波の設定

今回の津波浸水想定においては、茨城沿岸に最大クラスの津波をもたらすとされる「東北地方太平洋沖地震津波」と「茨城県想定津波」の2つのL2津波について、それぞれ茨城沿岸全域において津波浸水シミュレーションを実施し、シミュレーション結果を重ね合わせ、最大となる浸水域、最大となる浸水深を抽出しています。

最大遡上高についても同様に、それぞれのシミュレーション結果を重ね合わせ、地域海岸ごとの遡上高のうち、最大となる値を採用しています。影響開始時間は、地域海岸ごとに2つの津波の影響開始時間を算出し、最短となる時間を採用しています。

対象津波	東北地方太平洋沖地震津波	H23想定津波
マグニチュード	Mw=9.0 Mt =9.1 ~ 9.4	Mw=8.4 Mt =8.6 ~ 9.0
使用モデル	中央防災会議モデル	茨城県モデル
概要	<p>平成23年3月11日、三陸沖を震源とした地震により発生した津波。東日本大震災を引き起こし、東北から関東を中心に甚大な被害をもたらした津波の再来を想定。</p>  <p>震源域</p>	<p>地震調査研究推進本部から平成23年11月に公表された「三陸沖から房総沖にかけての地震活動の長期評価（第二版）について」を基に想定した地震。</p>  <p>震源域</p>

用語解説

① 浸水域

海岸線から陸域に津波が遡上することが想定される区域です。

② 浸水深

陸上の各地点で水面が最も高い位置にきたときの地面から水面までの高さです。

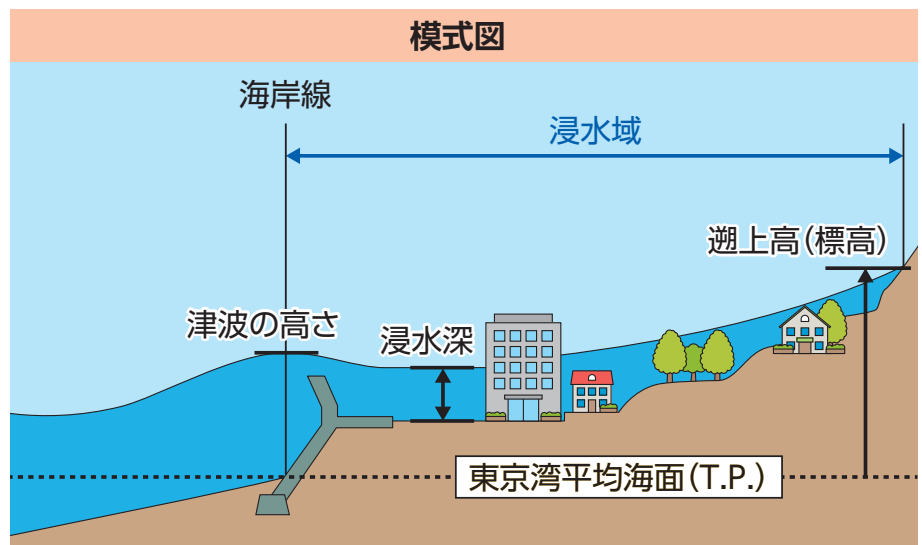
③ 最大遡上高

気象庁で発表する「津波の高さ」は海岸線での津波の高さをいいます。

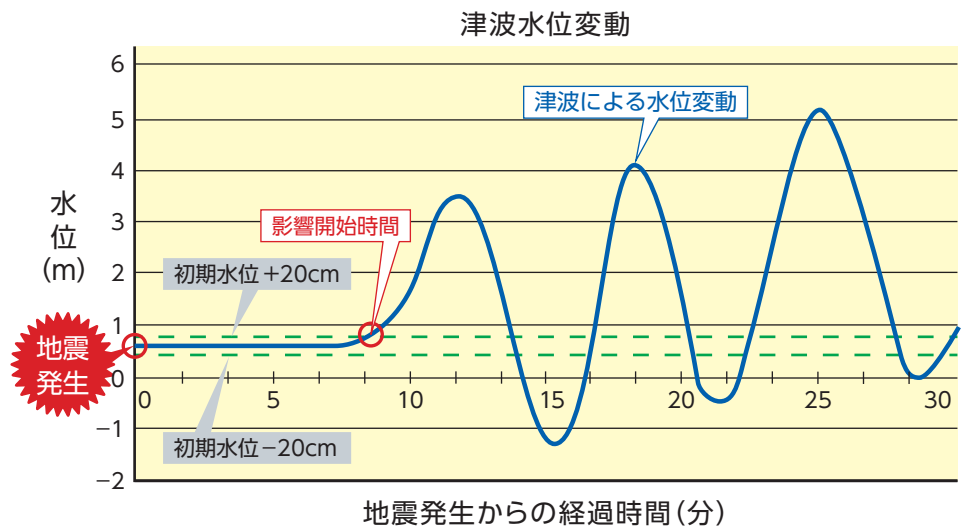
一方「遡上高」は、津波が陸地を駆け上がった高さのことを指します。一般的に津波の「遡上高」は津波の高さの2～4倍に達することが多く、地形によってはさらに高くなる場合があります。

④ 影響開始時間

海域を伝播してきた津波により、海岸線において初期水位から±20cm（海辺にいる人の人命に影響が出る恐れのある水位変化）の変化が生じるまでの時間です。



影響開始時間



※上の図は津波による水位変動の一例です。地震の規模や震源地によって津波による水位変動は異なります。

留意事項

- 「津波浸水想定」は、最大クラスの津波が発生した場合の浸水区域（浸水域）と水深（浸水深）を想定するものです。浸水域や浸水深などは、地形や河川、構造物などの影響により、浸水域外でも浸水が発生したり、局所的に浸水深がさらに大きくなったりする場合があります。
- 最大クラスの津波は、科学的知見を基に、過去に実際に発生した津波や今後発生が想定される津波から設定したものであり、これよりも大きな津波が発生する可能性がないというものではありません。
- 東北地方太平洋沖地震に伴う津波の浸水区域（実績）は、実際の浸水域などとは異なる場合があります。